

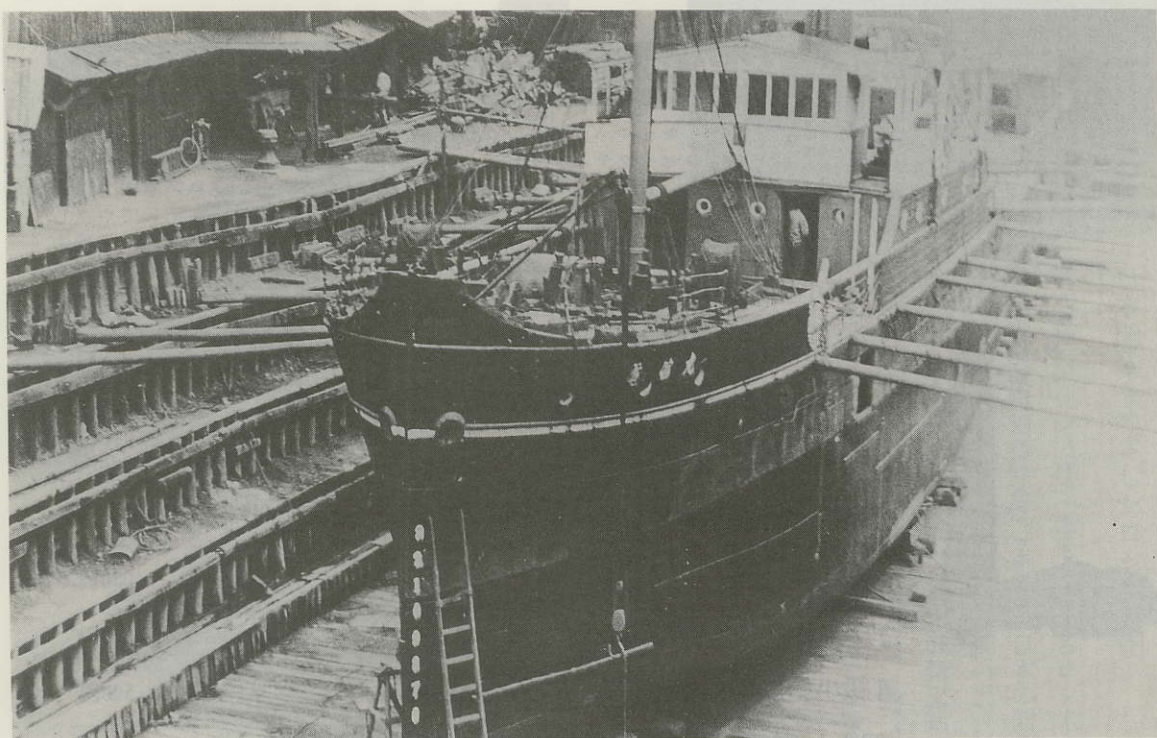
# 電 信 丸

《竣工時の主要目》鉄製貨客船、船主不明、230総トン

主機単気筒レシプロ2基、2軸

1873年東京セイガイ木下鉄工所建造

## 西南戦争から第二次大戦後まで84年 生き抜いた日本海運史上の最長寿船



### 山高五郎さんのこと

最初に山高五郎さんの思い出を語ろう。

山高さんは一八八六（明治十九）年生まれだから、生きていけば優に百歳をこえる。本職は船の電気機装設計家であったが、その令名は余技である海事史研究と海洋画の世界で知れ渡っていた。

とくにその見事な船舶画は、あまりにも有名であり、船ファンであれば、イラスト画などで山高さんの絵を必ず目に行っているはずである。山高さんの船の絵は、描写力の正確なことはもちろんだが、単に正確というだけでなく、その描写には温かみがあり、船が生き生きとして情感が溢れていた。

山高さんは一九八一（昭和五十六）年夏に、九十四歳の高齢で亡くなったが、その半月前に、山高さんの『図説日の丸船隊史話』が至誠堂から刊行された。山高さんは、この本の装丁本を見ずして亡くなったわけである。

『図説日の丸船隊史話』は、雑誌『世界の艦船』にかつて山高さんが連載した『近代日本船舶史稿』を中心にまとめられたものであるが、そのベースは、戦時中に千歳書房から刊行された名著『日の丸船隊史話』である。私事にわたるが、この『日の丸船隊史話』は高校時代、船好きの筆者の目を海事史の世界に



向けさせた本であり、筆者は今でもこの本を、珠玉のように大切にしている。

筆者が山高さんと親しく話す機会を得たのは、山高さんの最晩年であった。山高さんも筆者も日本海事学会の創立以来の会員であり、月例会にまめに出席する山高さんから古い船について教えを乞うたのが、おつき合いのはじまりだった。当時の月例会には、住田正一、村上人声、須藤利一、高橋邦太郎といったそうそうたる名士が毎回顔を見せ、若輩の筆者などはいつも隅っこで小さくなっていたが、控え目で無口な山高さんだけは、なんとなく近づきやすい雰囲気があったのである。山高さんは非常にシャイな人だった。

その山高さんに筆者が初めて声をかけたときの話題が、今回紹介する「電信丸」の船歴についてだった。筆者が海事関係の原稿を書いたのは、「柳原良平船の雑誌①」の「電信丸のこと」が最初であるが、この小稿は山高さんから得た情報が下敷きとなっていた。

### 瀬戸内海の快速客船として誕生

前回は、現在も中国で生存の可能性がある船齢八十八年の超老朽船「湘江丸」について書いたが、この船は中国船としての在籍期間のほうが長いし、戦後の消息が乏しい。対する今回の「電信丸」は、八十四年間も日本船

として稼働した実績があり、日本の近代海運史上の最長寿船といつていいだろう。

「電信丸」は初め「神戸丸」と称した。一八七三（明治六）年の誕生だから、江戸が東京と変わって間もないころ。街ではチョンマゲ姿が珍しくなかった。二百三十総トンの鉄製客船で、建造地は東京築地。最初の船主は不明だが、関西の個人船主だと思われる。

竣工後「神戸丸」は瀬戸内海航路に就航、快速をもつて知られた。のちに「電信丸」と改名したが、その快速ゆえに名付けられたものであろう。山高さんによれば、西南戦争のときに、「電信丸」として軍事輸送に従事したとのこと。次いで一八八四（明治十七）年、瀬戸内の中小船主が結集して大阪商船を設立した際に、新会社へ現物出資された。

三年後、「電信丸」は大阪の尼崎伊三郎氏の手に渡り、貨物船として明治・大正・昭和の三代を生き抜くことになった。その間、主機を三度換装しているほか、船体延長を含む改造工事を受けている。

ここに掲げた入渠中の写真は、尼崎汽船時代の「電信丸」で、これ以外に当時の船影を伝える写真は今のところ見つからない。尼崎汽船という船会社はいつぶう変わった会社で、スクラップ寸前のボロ船を修理して活用するのがうまく、ひところ船齢数十年の長

寿船が多数その傘下に集まったものだ。

### 天草を出航後消息を絶つ

太平洋戦争中の「電信丸」は船齢すでに七十年。人間だったらさしずめ古稀というところだが、戦時下とあつてはのんびりするいとまもない。それどころか、軍用船として東南アジアまで航海している。

無事戦火をくぐって生き延びた「電信丸」は、戦後も瀬戸内海を中心に活躍。一九五三（昭和二十八）年には広島島の個人船主の持ち船となり、船尾機関型に改装。船名も「甲栄丸」と改められた。

一九五七（昭和三十三年）十一月、「甲栄丸」は三百八十トンの石炭を積んで天草の牛深を出航し、そのまま消息を絶った。行き先は大阪だったが、この船には無線がなかったもので、出航後の状況は今もって分かっていない。

行方不明になったときの船齢は実に八十四年。しかも、改装して若返ったばかり。この事故がなければ、まだ当分は働けただろうというから、まるで船の怪物とでもいうべき驚異的な持久力の持ち主だった。不経済船が容赦なく処分される近年の海運業界の状況から見ても、「電信丸」のような長寿船は今後はもう現れないであろう。